新三大考

全

り 波5
874

[illegible]合[illegible][illegible]

リ 波5
874
巻

浩合家藏

凡例

一此書巳年二十まて三むかりの時に三大考の説を非がことなりと思ひえて新に考記せる説なり今の説とハ表裏（ウラウヘ）なるところなきにしも有らねど又後考の助とならむこともやとて其まゝにさしおくになむ

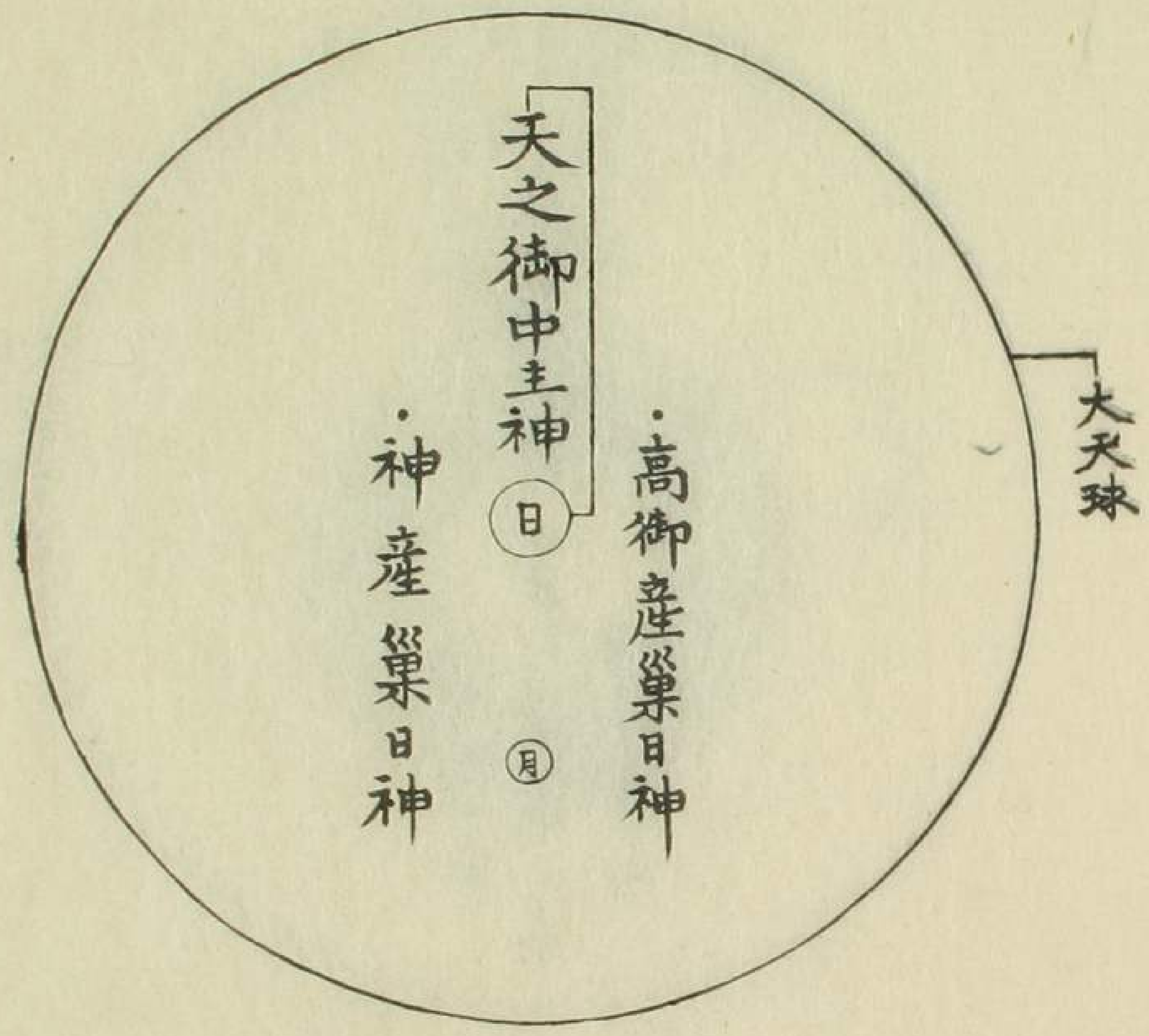
一此書上に図をあげ下に説を挙たり図説を引合せて悟るべし其説もとより大旨を示せるのみなれバ其證となるべきことをも落（モラ）して挙ざるものあり見む人補ひてよ

一此書簡畧（コトスクナ）なるを主としたれバ記傳の説など凡て自他

の説うち混(マジ)りし所よハ誰の説とも断(コトワ)らぬもあり見む人麁漏(アラウキ)をもて咎むることなかれ

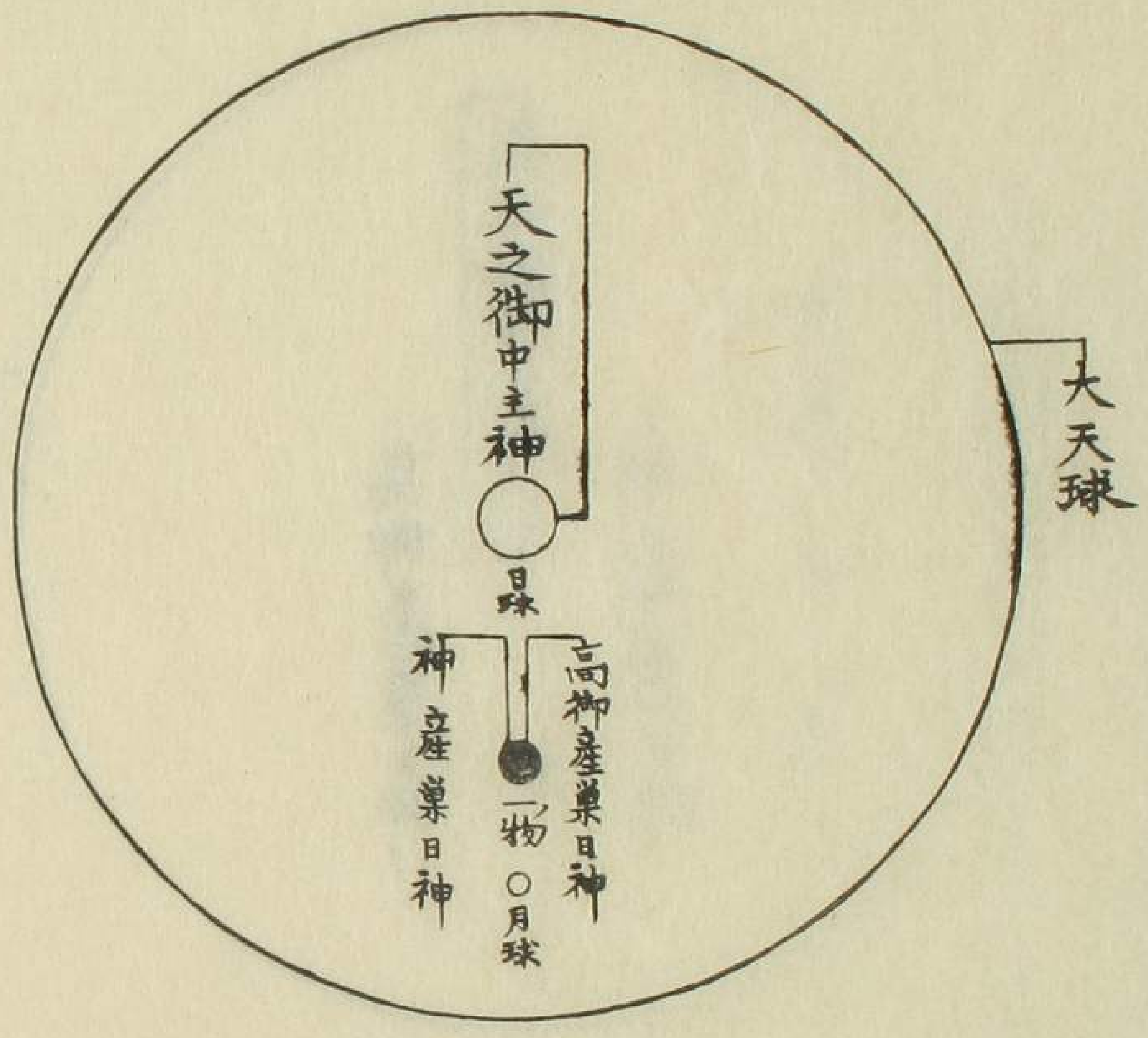
慶應二年八月　落合直澄

第一圖



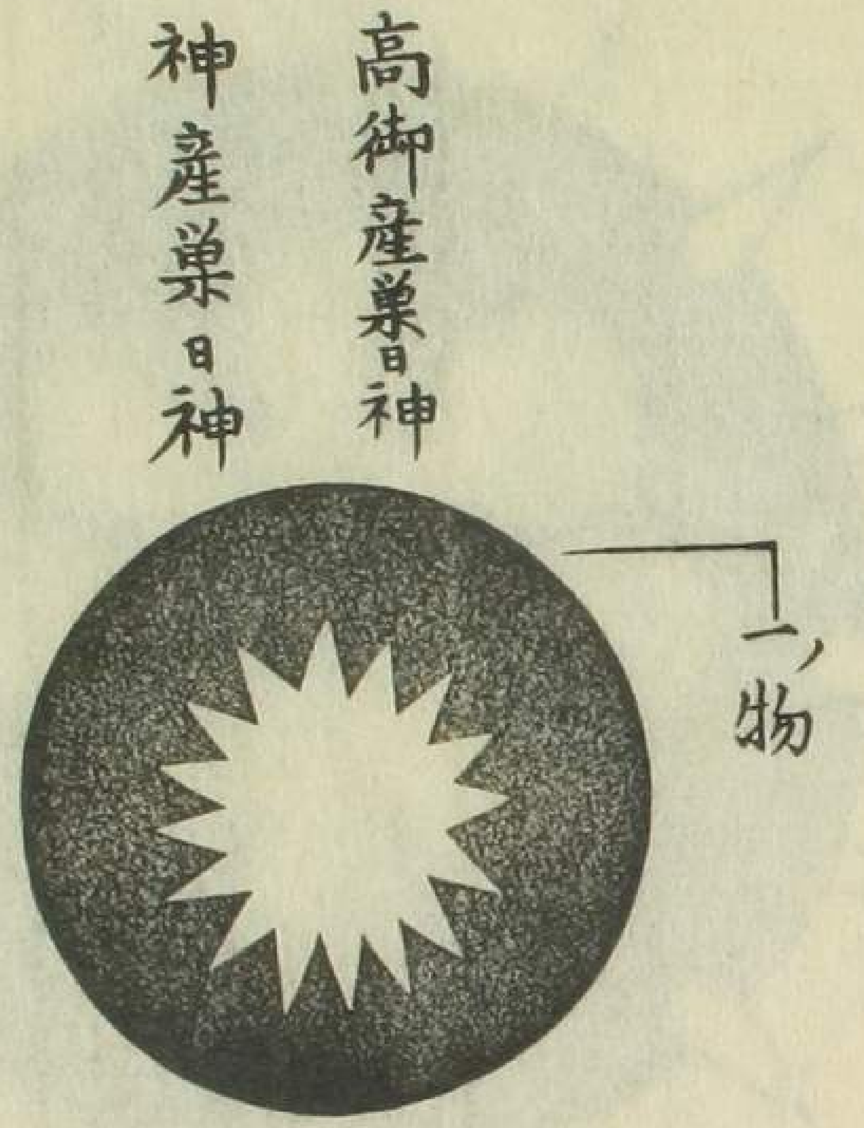
此図ハ大天球の中よ三柱の神の生坐(ナリマセ)る状なり○日月ハいかよして生(ナリ)けむや傳なければ知べからずたゞ此大地よ先ちてありしものと知るべし

第二圖



此圖ハ一ノ物大虚中ニ生出(ナリイデ)し状なり一ノ物と云へるハ後ニ天地泉と判(ワカ)るべきものなり混沌如鶏子(マロガレタルコト トリノコノゴトシ)とある文を思合すべし

第三圖

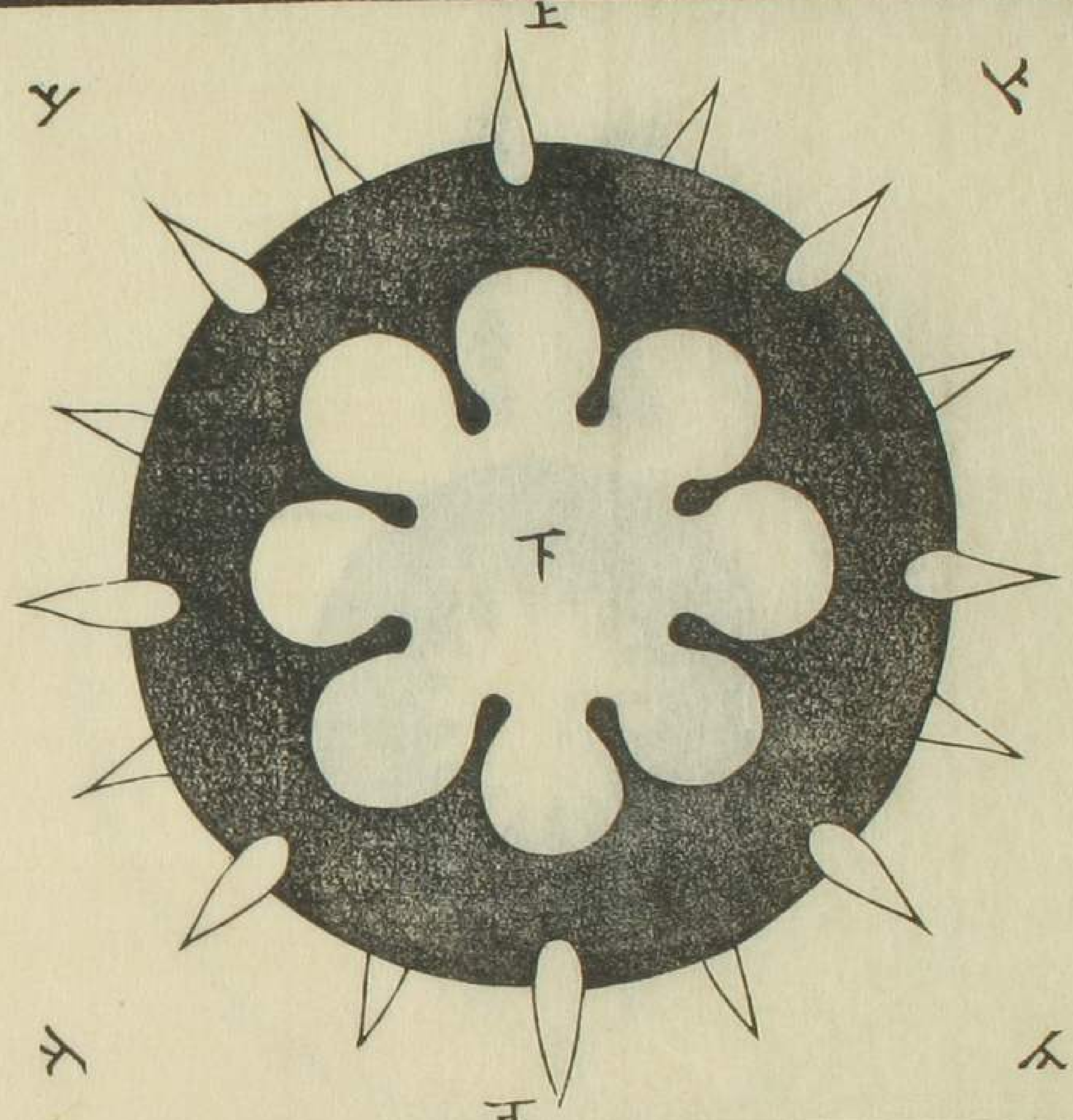


○此図より以下ハ大天球と日月とを略けりそハ紙の面狭くして畫き載するこゝならざれバなり

○此図より以下一ノ物の内部を見せむが為メニ一物を中央より切(キリ)断(タチ)て其切(キリ)口(クチ)を見(アラ)ハせり見む人其心せよ

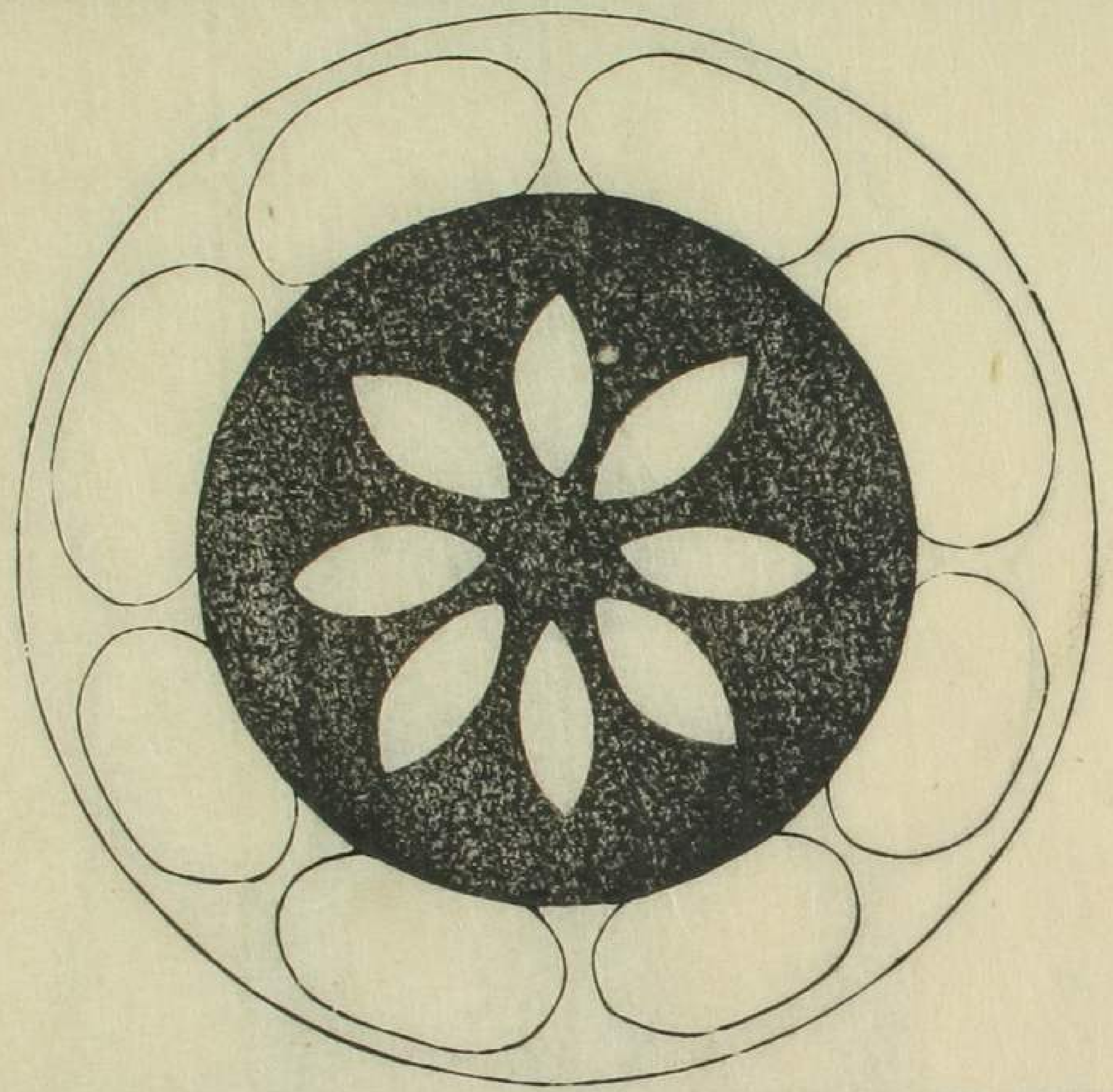
○此図黒き処ハ浮膏の如き物白き処ハ葦牙の如き物の發出(オコリイデ)むとする状なり

第四圖



かく図せるハ葦芽の如き物の天と成らむとして一物の中より燃上る状なり かく図せるハ浮膏の如き物の泉とならむとして垂下る状なり元より大虚にハ上下の差別なく唯地外をもて上とし地心を以て下とされバ一処より燃上り一処より垂下るべき由なし故に今四方八方より燃上り四方八方より垂下る状になものせりされど一処より天泉の燃上り垂下りしことと見ても説れざるにハあらじ

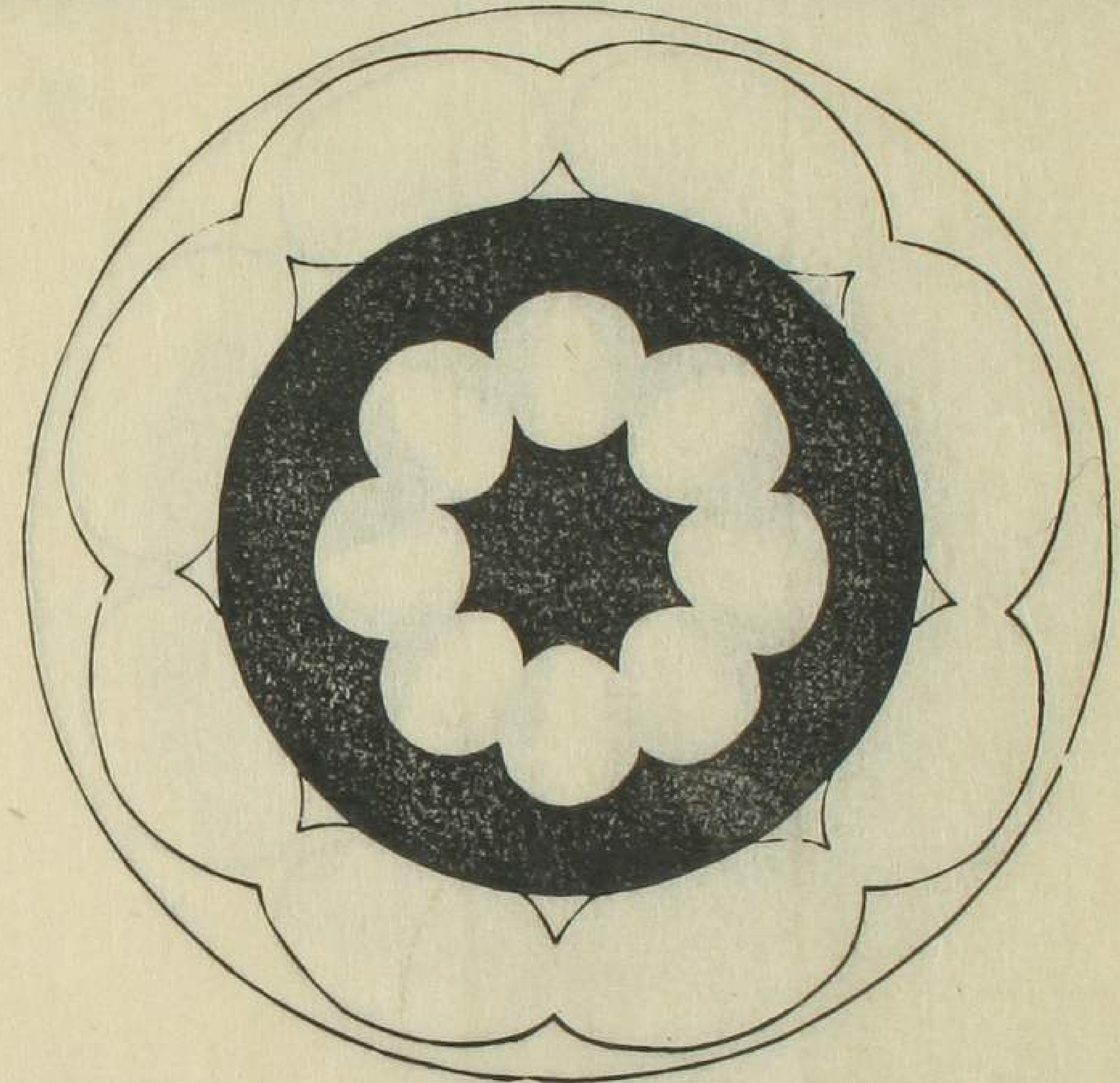
第五圖



此図ハ燃上りし物ハ天と霏ぎ垂下りし物ハ泉と凝しかど天泉ともに未ぐ断れ離れざる状也されど天と霏き泉と凝りし状ハくやありけむと大方に推量りて図せるなれバ必しも泥むべからじ

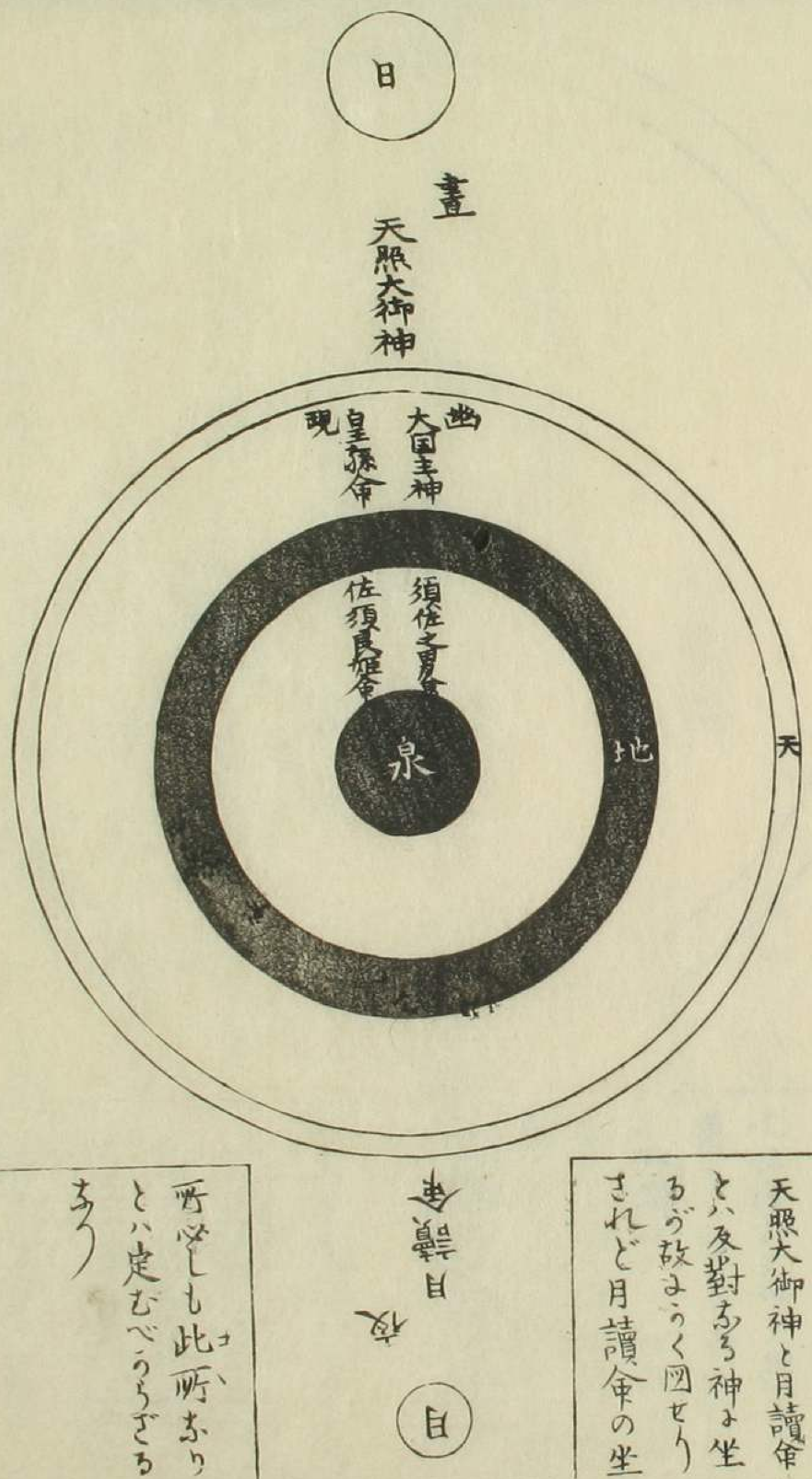
今試に一処より燃上り垂下りて天泉の成れる状をここに図ニ人々の心々に考てよ

第六圖



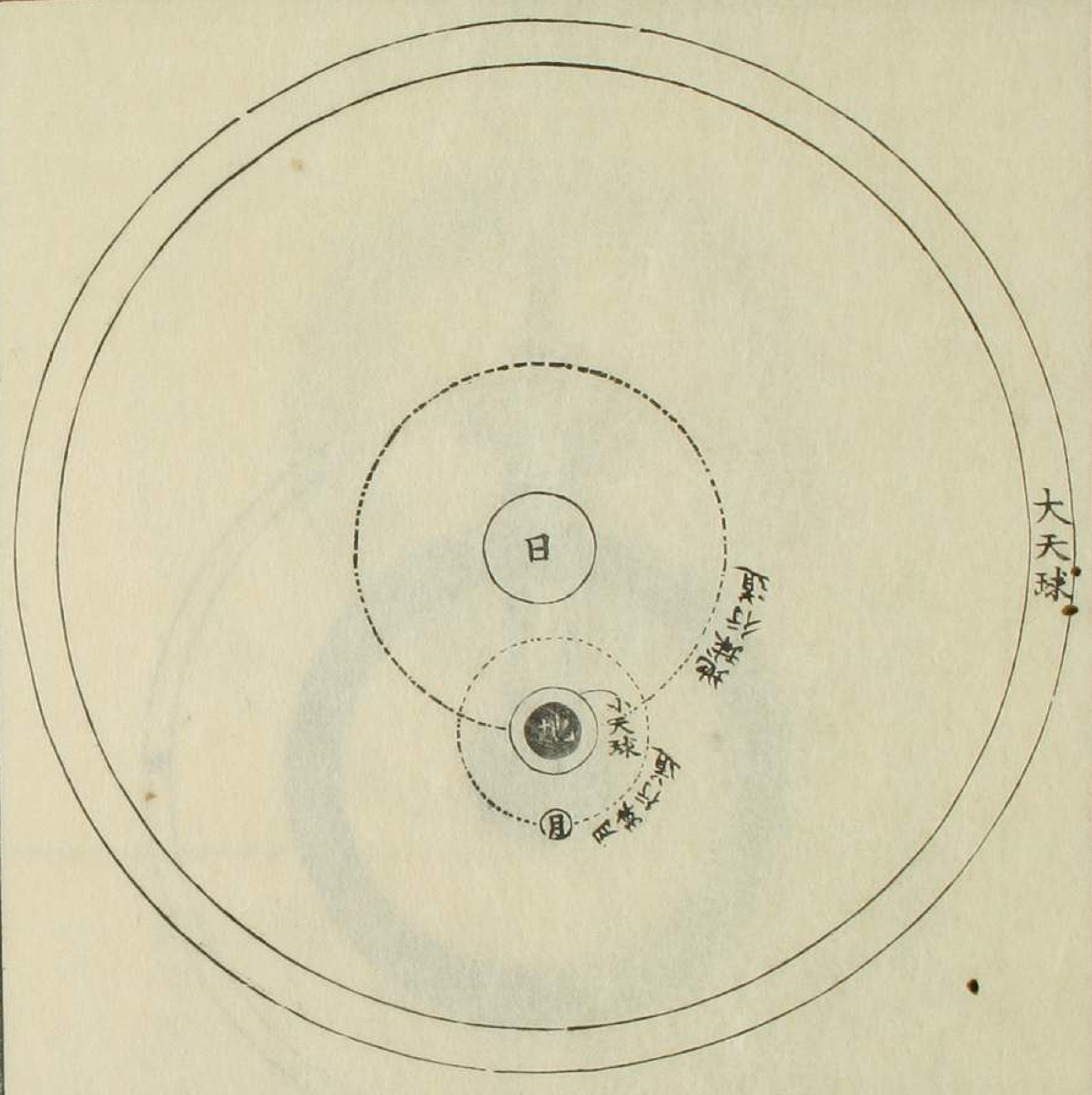
此圖ハ天地泉の斷れ離れし狀のくやありけむと大方に圖せる也
漢籍曰渾天形如彈丸地在其中天包其外猶鷄卵白之繞黄まと天體如碧瑠璃透映まと天體堅清など云る語を考へ合をべし

第七圖



此図ハ三界を神々の持分け賜へる狀なり天照大御神と月讀命とハ反對なる神の坐るが故かく図せりされど月讀命の坐所必しも此所なりとハ定むべからざるなり

第八圖



此図ハ心ヲ大虚に居ヱて日地月を始め大天小天の状を傍より見たる状なり地月の行道等ハ今の世の天文説によりてものしつ

小天球に穴路ありて神等まゝ内外空氣の行通ふを以て見れバ大天球にも穴路ありて内外の空氣もまゝ彗星等の行通ふ処あるなるやと思はるれども彗星のことなどハ暫くさしおくべし

新三大考

武藏國

落合直亮　閲

落合直澄　著

第一圖説

記曰天地（アメツチ）初發之時（ハジメノトキニ）於高天原（タカマノハラ）成神（ナリマセルカミノ）名天之御中主神（ミナハアメノミナカヌシノカミ）次高御産巣日神（ツギニタカミムスビノカミ）次神産巣日神（ツギニカミムスビノカミ）云云

天地初發之時と云る詞ハ極めて古を言に添へて云る詞にて所謂る序語なれバ軽く見てあるべし○高天原成神ハ古語拾遺に天中所生之神（アメノナカニナリマセルカミ）とあるを以てくしとく阿米てふ名義ハ清陽（スミアキラカ）なる物の霏（タナビ）き寄附（リ）ける義にて阿

音ニハ清明なる義あり明鮮赤などの阿これ也米音ニハ引寄する義ありて召目廻などの米これ也扨此阿米ニ二義あり其一ツハ此大地を取巡したる天ニて天地とつゞけて云時の天なりこハ後に生いでたる天也今假に是を名けて小天といふ也又一ツハ大虚を取巡したる天ニて則天之御中主の天これ也今假にこれを名けて大天といふ也此時ハ未ど天地生ざりし時なれバ大地を取巡したる天ニハあらざること勿論也天地生出し後より後名を前へ推巡して云へるならむとも思へるれど此大神ハ産霊神にも先て坐れバ甚既より其名もありけむかしその大天球の真中ニ成坐るとの義ニて天中所生とハ云る也神ニ又二義あり一ニハ活用ある神ニハ人体と同し状ニて種々の御術を成し賜ふ神ニて産霊大神伊邪那岐大神などの如き神これなり二ツニハ物体の奇霊なるを指して云る神を指て神と云万葉ニ冨士ノ山る類ニて天之御中主神國常立神あり心得おくべし○なとの如く活用なき神これなり天之御中主神御中ハ真中央と云るが如し主ハ之字斯の約りにて字斯ハ領知の義也大天球の真中央ニ坐して天霩の中のことを領き知看せる神なり此大神ハ此所ニ一度御名の見えたるのみにて聊も御術のなきハ活用の神ニ坐ざる由なりと知べし推量りに云むハ恐られど此大神ハ天日の別名ならむかと思ゆるそハ天の真中央と云ふべき所ハ天日の外ニハあらざれ

バふり○高御産日神神産巣日神高ハ健の轉語よて健く雄々しき義よて男神の称也此二神ハ男女の神ふ坐せることハ神漏岐神漏美とも云るにて知べし御ハ称辞也産巣ハ男子女子苔生草生ふどの生よ同じ日ハ称辞也此大神ハ天地萬物を生成し賜ふ御徳よ坐せりされハ世よ神はしも多よ坐ども此神ハ殊よ尊く坐して産霊の御徳申にもさらふれバ有ふ中よも仰ぎ奉るべく崇ね奉るべき神ふふむ有ける

第二圖説

紀一書曰天地初判一物在於虚中状貌難言云云

こゝに一物と云るハ後に天地泉と判るべき物の混沌れて大虚よ生れるをさして云る也状貌難言とハ其一物の状ハ言よあげてハ言がたしと也

第三圖説

紀一書曰天地未生之時譬猶海上浮雲無所根係其中生一物如葦牙之初生泥中也

天地未生云云とハ天と地と未ど判れざる時をいふ譬猶海上云云とハ一物の大虚ふ漂へること海上ふ一叢の雲の浮びて此所を根として係る所ふきが如くふるを云り其中とハ浮雲の如き一物の中を指せる也葦牙云云今現よ葦の泥中に生初たるを見るに幾許ともふ

くひしくと生ひて泥沼を突破りて發出むとする勢見
ゆる物あり一物の中に其葦牙の如き狀の物生れりと
云へるハ天と成らむとする物の發出むとする牙を顯ハせ
る狀を云る也

第四圖說

記曰次國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣流之時如葦牙
因萌騰之物而成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神次天之常
立神云云次成神名國之常立神次豐雲野神㊀次㊀泉㊀之㊀常㊀立㊀神
國稚とハ後よハ國と成るべき彼ノ一物の未だ稚く初々
しき程を云る也如浮脂とハ其質の油の如くなるを云

る也久羅下云云とハ海月の海中に漂へるが如く一物
の大虛中に漂へりしを云る也如葦牙云云こハ彼ノ一物
の中より天と成らむとする物の燃上る狀葦の芽のひ
しくと生出るが如くなりしを云る也因物とハ其物に
よりて其物の靈神の生坐しゝを云る也宇麻志ハ美称
辭也葦牙ハ葦牙の如き物よりて成坐る故の御名也
比古遲ハ男の尊称辭也此神に對へて豐雲野神と云る
神あり豐ハ美称辭也雲ハクミクムとも活きて物の凝
る意と初めて芽ぐ意とを兼たること也淚ぐむ芽ぐむ
角ぐむなどのくむに同し彼の泉と成るべき物の大地

の下方よ了芽ぐミ芽して垂れ下る義也其物よ因りて
成坐る神也

第五圖説

第六圖説

天常立神國常立神ハ天底立命（姓氏録）國底立尊（紀一書）とも
云へり底ハ曽伎曽久とも通へり万葉廿五十三丁天雲の
そこひの極ミ同三四十六丁天雲の曽久敝の極ミ同十九天
雲の曽伎敝の極ミ又山のそきのそきふども云へり天
底立國底立ハ祝詞ふ天能壁立極國能退立限とある是レ
ふり曽伎ハ限堺の義ふり立ハ際だつ（白と黒と際だちて見ゆるふど云）
り堺を立ふどの立の意よて常の立とハ意聊ことふり

天のそき立極國のそき立限ハ天の限の立る極國の堺
の立る極の意也うくて天の壁立極知しめして天を作
り堅め成ルを天底立神といひ國のそき立限り知看し
て國を作り堅め成ル神を國底立神といへり是よより
て思へバ泉之底立神と云る神も必有りけむを後ふ漏
しゝふるべし（伊邪那美神の與黄泉神相論と詔へる黄泉神ハ黄泉底立神よハあらじ乎考べし）
泉のこと後よ至りてハ時々見えされバ其始メも無くて
ハ叶ハざることふりさて清陽者薄靡而為レ天重濁者淹
滞而為レ地とある文を此条よ合せて悟るべし

第七圖説

記曰伊邪那岐大神云云賜天照大御神而詔之汝命者所知高天原云云次詔月讀命汝命者所知夜之食國次詔建速須佐之男命汝命者所知海原矣云云

天照大御神ハ日神とも於保比屡咩能武智とも申し奉れる神にて天照の天ハ天國に坐るよりて云る也照ハテルを延して尊詞に云る也紀に光華明彩照徹六合とある如く御体に光彩ある神に坐せり凡て尊き神にハ光あるものなりとぞされハ此御名ハ御姿より出たる御名なり日神とハ此大御神ハ日の光氣を受つぎて此天地に及ぶことを掌りて坐し由の御名なり於保比屡咩ハ晝を掌りて坐る由の御名なり○高天原記傳云天ハ虚空の上に在りて天神たちの坐まし御國なり云云凡て世の物知人さへ漢籍意に泥み溺れて神の御上の奇靈きを疑て虚空の上に高天原あることを信ざるハいと愚なり云云まづ天ハ天神の坐まし御國なるが故に山川木草の類ひ宮殿その外萬の物も事も全御孫命の所知看此御國の如くにしてなべてすぐれたる處にしあれバうゝることゞもバ漢籍にいへる天とハ甚く異なる物ぞゆゑ彼國書の説に惑ひて正しき神代の傳を誣説曲て外國にハ正しき古傳說のなき故に天の實のさまを得知ずてたゞおしはかりの空理をのみいふ也大方のなてさまも神たちの御上の萬の事も此國土に有る事

の如くになむあるこは此記及書紀神代巻を見て知べしミな正しき神代の傳説なり云」以上直澄云こは本居大人の数年考を尽されたる説にていともめでたき説なるを後に三大考の説を信ばれしはふと思ひ迷はれしにこそあらめ古史傳に云阿米とは蒼々として上方より始て四方に廣く遠く見遥さるゝ疆界をいふ此疆界ある内を與といふ即世間ともいふ扨又凡て障る物なく廣く遠く疆界も何もなき處を虚空といふ云云扨この大虚の外方に涯あることは何を以て知ると云はむに此は見極ること能はざれども神速須佐之男命の天壁立極巡坐と有るを考合せて云へるなり云云今見放るところ（斯の如く四方に向伏廣く遠く壁立さる状に見えて漢籍に天圓如倚蓋といひ又爲蓋象天などもいひ此頂上の處則北辰にて此より四方に下垂るゝ下の方は大地に障りて見えざれども大方圓形なることゝ思へる云云同書に云或人問天日の質は如何なる物ならむ答ふ此は知べからざる事なれど強て云はゞ始に一つ物に含まりたる時より後に清易に然騰れりと有をも思ひ合するに譬ば水晶の中に專と火氣を含みたる如くにて直澄云何の石も火を含めれど其中に白石の火を然に含みたる又水晶は殊に多く火を含めるなどを思ひ合せてげに照徹炫く質と所思よりさる言とおぼえたり」以上直澄云

平田大人常に三大考の説を信れてハ有しかどかくさまに真の天象を悟られたりしハ後人の及ぶべからざる處なり上件ハ神典の上にて説れたるなるが現在の理におきても大地の外に大地を包括る物必しもなくてハ叶ハざること也そハ此大地一晝夜に一自轉ありといへバ地の巡ること一晝夜に万余里なりかく峻く巡りてハ其為に風を起して人類草木など立ちてハえあるまじき理なり是ハ既く異國にても論ひし人もありき又日球の火も此國土の火も元ハ必同物ならむと思ふに此國土の火ハ日光に比てハ其光いたく劣れ

りされども此國土の火も瑠璃盤に其光を受けて見れバ恰も日光の如し讀書燈にて知べし此を以て思へバ日光も天國と云る清明なる水晶球に受けて此地球に及ばせるが故にかく光彩の著明るきなることしられたり天國ハ真の幽冥境なれバ現の人の目にハ見えざるが理也此國土なる幽界また其境に住ミ賜へる神たちさらに見ることハならざるものをやされど其天國に住ミ賜へる神等より見賜へバ猶天國も透徹れるものにもあらず神等の御身も透徹れるにもあらず此國土に人の住めると同し狀に見えるなり○或人問天照大御神ハ日球

の中に坐して日球を知看せるにハあらじと云へバ此大御神の天磐屋戸に隠り賜ひし時に天地ともに闇くなりしハ如何なる由ぞ答云天照大御神ハ日の光氣を此天地に及ぼし術を知看せれバ明くせむも暗くせむも御心のまゝ也彼時ハ大神甚く怒り坐て常闇となし賜ひし也又問然らハ天照大御神の生坐ざる以前ハ如何にして此地球に日光の及びしぞ答云此天照大御神の生坐ざる以前ハ高御産巣日神其術を掌り賜ひてありしこと天照大御神に異ならじ故此大神を天照高弥牟須比命（山城風土記）とも云り天照大御神の生坐て後ハ日光氣を此地球へ及ぼし術を天照大御神に譲り賜ひし故に日光氣のことハ天照大御神の御心のまゝ也かく其御術を譲り賜て後ハ高御産巣日神と云へども日光氣を御心のまゝに為たまふことハならざることゝ見ゆ（そハ石屋戸の条にて知べし）又問伊邪那岐神の迦具土神を切り賜ひし時其血天國なる五百津磐村に激り付しと云へるハ如何見て説るべきや答此ハ天國の下方より石村の石根を拆破りて天上に逆りしなるべし故其始に生坐し神名を石拆神根拆神と云へりさて其血火天上に逆り出し時の名を甕速日神樋速日神と云るなるべし（甕ハ大嚴の義）

紀国冊生神社祝詞に天石倉押放天石門忍開給比とあるハ天石谷の門を放開と云へる詞なり

速日ハ速ぶる義擬ハ火の義なるべし此時天國にてハ如何なる状なりけむ知れねども推量に云バ此國にて冨士浅間などの燃出し時の如くにや有けむさて其拆け破る所より天香山また天山なども崩落たりけむとぞ思ハる又問天神等の天國より此國へハ如何なる所より通ひ賜ひしにや答此國土より泉國へ通ふに穴道あるを以て思へバ天國より此國へ通ふにも猶穴道あること知られたり万葉二に天原石門乎開神上上座奴また大祓詞に天津神波天磐門乎推披氐などある石門ハ則天國の穴道の門なり神武紀開天關披雲路とある天關もこれにて

記に下照比賣之哭声與風響到天とあるを以て見れバ球に穴ありて内外の風氣の出入せることを知れたり

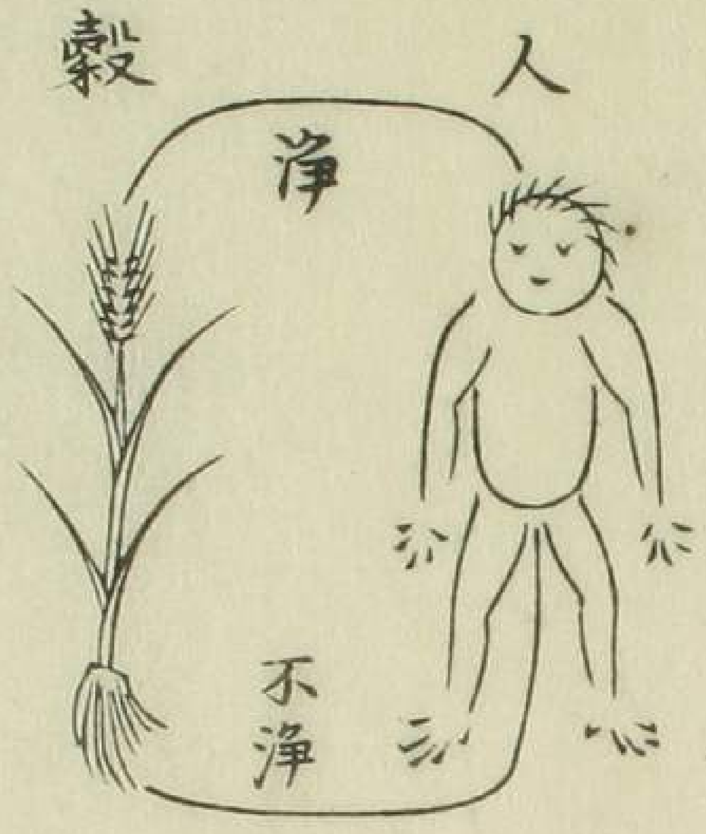
祝詞に磐座と有ル座ノ字ハ借字なり天國の穴道の谷なせる處を云る也谷のことを久良と云ること記傳五に委く云れたり天國の穴道を放れて天浮橋に出しを天之磐座放とも云へるなり又記の天若彦の条に自其穴衝返下者云云こハ矢にて天球を衝破りしにハあらで元よりある所の天穴へ射入しなるべしなどあるにて天國に穴あることを悟るべし○月讀命の御名ハ月と夜とを知看る義也或云夕月夜さにや岡べ云云など云へる哥のあるを以て見れバ月を直ちに月夜ともいふう今も國によりてハ月をたゞちにお月夜などゝ云へり日と晝と詞の通ふを以て見れバ月をたゞちに夜と云ふも理なきにあらバ見ハ山津見などの見に同しく尊称辞也此神ハ天國に坐して月氣の此地球に及ふ所と夜のことゝを掌りて坐せバ所知夜

之食國と云ハ天照大御神の知食天國の夜のことを掌れとの意なるべし紀に知天事とあるに合せて夜之食國も天国の外ならざることを悟るべし紀一書に天照大神怒甚之曰汝悪神也不須相見乃與月夜見尊一日一夜隔離而住とあるハ一日一夜の間離放て相見たまふこと無りきと也されと終にハ其御怒も解けて又立並びて天事を知看るなるべし志のハあれど後に至りて二神並立て事取り賜へることと見えざれバ終に離れ放りて住賜へることとも所思るり○建速須佐之男命御名ハ建く峻く進む義なり所知海原ハ紀一書に可以治天下とあるに合せて見れハ現國を知看せといふこと也されど此神ハ現國をバ知さぞとて

泉國に入賜ひぬ○泉國ハ此大地の根底にあるが故に根國とも底國とも云り古史傳云或人問豫美都國の質ハいかなる物ぞ答天御國に比てハ重く濁れる大地の根底に凝成れるげにや汚き物の凝結びて甚く汚き質とこそ所思るれそハ伊邪那岐命の伊邪那醜目穢國と詔へるを以て知られたり云々以上直澄云泉國ハげに穢き極にハあれど此大地より送り入る所の穢をさそらひ失ひて清きに返るところ也或書に西國に火山とて火を吹く山ありて其山より魚骨などの汚物を吹出しと云へりこれによりて思へバ現汚物ハ国土より海原

に流し入れ海原にて一洗して盡ざるハ海原より地
中ノ水脈へ流し入れ又其ノ水脈より火脈へ送り入れて焼
尽しさて其焼残の物火山にて吹出すことゝ所思とり
又幽冥の穢ハ大祓詞にあるが如く瀬織津姫と云神万ヅ
の穢を海原へ持出れバ速秋津姫と云神その穢を水と
共に地中に可々と呑入れ其呑入れたるを大地の下方
にまに氣吹戸主と云神泉國へ吹放ちやれバこゝの状にて思へ
バ大地と泉國との間に空虚あること知れとり根國にまに速佐須良姫と云神
の神術にて其をさにらひ失ひて清に返し賜ふありき
う清に返れバ又地上に返り上ることゝ見えとりこの

地と泉と反對の状ハ人と五穀と反對の如し今野之口
氏の説をこゝに挙て其大旨を知しむべし人ハ天に屬



て頭を上にし五穀ハ泉に屬て頭
を下にし人ハ穀實の淨を食ひて
不淨物をまり五穀ハ人の不淨物
を吸て淨實を結ぶありり淨より不
淨を生し不淨より淨を生し巡環て端ありき状實に天地
泉の理を尽ヤりといふべし 今説辨廿一丁見合べし

新三大考大尾